

昭和20年終戦の年に生まれ、喜寿を迎えました。

私は1945年6月11日の終戦直前に生まれました。8月15日の終戦記念日も（喜寿）77年目になります。

私は毎年8月15日の終戦記念日には自分の年齢を再認識するとともに、戦争について考える日にもなっています。77年間戦争がない国、「日本」、平和、その幸せを喜び祝って（喜寿）良いと思います。

今年に入り、山崎豊子の小説を再読したくなり、『華麗なる一族』『不毛地帯』『二つの祖国』『大地の子』『沈まぬ太陽』『運命の人』ほか『暖簾』など、読書マラソンをするように一気に読破した。山崎豊子は、戦中派作家として、多くの取材と多くの時間をかけ調べ上げ、戦争の悲惨さを取材・執筆しているのです。

『不毛地帯』では壺岐正が主人公で、シベリアからはじまる白い不毛地帯、後半は石油開発で終わる赤い不毛地帯という構想である。壺岐正のモデルは、伊藤忠商事で専務、副社長、会長を務めた瀬島龍三氏である。

1941年12月8日の太平洋戦争開戦では、陸軍のほぼすべての軍事作戦を指導。マレー上陸作戦、ガダルカナル撤収作戦、インパール作戦、台湾沖航空戦、菊水作戦（特攻作戦）、対ソ防衛戦など担当した。1945年関東軍参謀に任命され、満洲へ赴任、同年8月15日の日本の降伏後、極東ソ連軍司令官ヴァンシレフスキー元帥との停戦交渉に就くも捕虜となる。その後シベリアで11年間抑留される。この間1946年に極東国際軍事裁判にソ連側証人として出廷。シベリア抑留から帰還後、1958年に伊藤忠商事に入社する。2007年9月死去、享年95歳であった。本書ではソ連による捕虜に対するシベリア抑留中の過酷な肉体労働の強制と、壮絶な生活が描かれている。後年、瀬島氏はシベリア抑留に関し、「日本の軍人や民間人の帰国を規定したポツダム宣言9条違反であり、日ソ中立条約を破っての対日参戦とともに、スターリンの犯罪であった」と述べている。シベリア抑留者は57万5千人、強制収容所に入れられ、奴隷的強制労働を強いられ、5万5千人が死亡している。

『二つの祖国』では、日米開戦と同時に、12万人の日系人が砂漠の奥の強制収容所に送られ、鉄条網で囲まれた強制収容場の中で合衆国への忠誠心をテストされた家族の苦しみ、一家離散の実情が描かれ、日系二世が砂漠の強制収容所の中から、ヨーロッパ戦線へ志願し、戦死した二世、太平洋戦線で、日本軍の情報収集に当たり、戦争を予想より2年早く終わらせたといわれる日系語学生の働き、合衆国の投下した原爆で被爆し死亡した二世の存在、そして東京裁判の真実、戦勝国と敗戦国、裁く者と裁かれる者、いずれもわが同胞、二世として、そして東京裁判のモニターとしての天羽賢治は二つの祖国の間に突き落とされていく。今年、バイデン大統領は日系人の強制収容所送りは、大きな誤りであったと、謝罪をしている。本書により謝罪する理由が理解できる。

今年、2022年は終戦後（喜寿）77年であり、沖縄返還（5月）、日中国交回復（9月）から50年になる。

『大地の子』では主人公・陸一心こと松本勝夫は敗戦直後の満洲で祖父と母を喪い、父と妹とは生き別れになる。多くの試練にさらされるが、やがて製鉄所建設という日中共同のプロジェクトに参加する。「子は党と国家を担い、実の父は日本企業を担う」という形で父子再会を果たす。作中、戦争孤児のひとり「私たちは、二度、日本政府から捨てられました。一度は祖父や父の代に、体のいい棄民として、ソ連国境近くの開拓団に送り出され、敗戦時には、関東軍に置き去りにされて捨てられました。それから三十余年経って、その子、あるいは孫の私たちが、豊かな日本に帰って来たにもかかわらず、今また三度見捨てられようとしているのです」と語っている。

実は『大地の子』の最大の協力者は胡耀邦総書記（当時）である。山崎豊子は「取材の鬼」といわれ、日中双方の背景を取材し、それだけで3年間を費やしている。それからその場面や人物が実際にリアリティを持つかの

取材をする。足かけ八年の取材執筆期間を「大地の子」にかかりきりになる。山崎豊子は1984年から毎年、異例といえる、胡耀邦総書記と三度の面談を果たし、初回に「中国を美しく書くことは必要ない。欠点も暗い影も書いてよろしい。ただしそれが真実であるならば」と取材のお墨付きをもらった。この会見が「人民日報」で大きく報じられ、記事を切り抜いてパスポートに挟み、各地で「取材拒否」に遭う度に記事を見せる。あつという間にフリーパスで取材ができた。北京の奥の院・中南海（共産党・政府の中核）から極貧にあえぐ農村まで存分に見学ができた。とりわけ三箇所－牡丹江、内蒙古、寧夏におよぶ労働改造所の訪問と囚人へのインタビューは、外国人は無論、中国人さえ立入絶対禁止である。空前絶後のことであった。二度目の会談で、山崎は「監獄のシーツは北京飯店のシーツよりもきれいで真っ白、監獄の厨房に入ると一般農民の口には入らない大きな豚肉がありました。しかしその豚肉は私たちの見学のためにわざわざ用意したものだだったことが後で解りました」と素直に語った。胡耀邦は笑いながら「焦ってはいけない。私だって地方に視察に行けばだまされる時がある」「嘘について、上の者を誤魔化すことはいけないことだ、悪い習慣になってしまった」と答えている。胡耀邦の総書記時代（1980年～87年1月）は「日中蜜月」の時代といわれた。83年訪日の折りには、中国首脳陣として、唯一、被爆地長崎の平和祈念像を訪れている。まだ厳しかった財政状態の中で三千人の日本青年を一週間招待してもいる（菅直人もその1人）。胡耀邦は何度も日中双方が「狭い愛国主義」に陥ることを戒めている。側近に「一人の人間の言ったことがすべてということに反対しなければならない」と語っており、これは鄧小平の「毛沢東がいれば毛沢東の言うことがすべて。私がいれば私が言うことがすべて」の対極にある思想だった。こうした開放的、親日的な姿勢は、当然ながら軋轢を生む。総書記解任の理由の六項目の一つに「日本の青年三千人を独断で中国に招くなど、外交姿勢が独断的だった」という文言があった。解任三ヶ月前に行われた最後の会談では、前二回の力強い口調は影をひそめ「順調に『大地の子』が生まれますように」といった遺言めいた言葉が吐かれた。89年の死去を契機に勃発した天安門事件はなぜ起きたのか、それを明らかにすることを中国政府は恐れている。「胡耀邦が失脚せず、中国を率いていたら、今のような中国とは別の“もう一つの中国”の形、そして“もう一つの世界”の形があったのではないか。」胡耀邦を知れば知るほどそう思える。『大地の子』で描かれた戦争孤児も文化大革命も、やがて歴史のひとコマになる。実の父親と再会した松本勝男こと陸一心は、父とともに長江・三峡下りの船に乗る。父は「ここでお前と別れて日本へ帰ってしまえば、私はまた独りだ。徳志さん（中国の養父）には申し訳ないが、息子のお前と暮らしたいのだ」と語りかけると、一夜明け、長江の滔々たる流れを見ながら一心は「私はこの大地の子です」。「養父母と暮らします」でも「中国にのこります」でもない「大地の子」なのである。

ここには国家・国境を越える普遍性が秘められている。「狭い愛国主義に」とらわれず、「日本人でも中国人でもない、日本人でもあり中国人でもある人間」の物語である。

『運命の人』は沖縄返還交渉における日米の密約を暴いた新聞記者の物語である。「戦時中、日本で唯一、地上戦が行われ、四人に一人が戦死したといわれている沖縄は、戦後も犠牲を強いられた。サンフランシスコ条約で日本本土と切り離され、米軍統治下に置かれると、米ソ冷戦を背景に米軍が沖縄の基地化を進めるため、1953年土地収用令を公布して多くの住民の土地を問答無用で取りあげた」。日本全体のうちの0.6%にすぎない面積に、米軍基地の75%が集中している異常な状態が、祖国復帰後50年たっても今なお続いている」

外務省機密漏洩事件の西山太吉氏がモデルであり、主人公と重なる西山氏とその婦人の理解と協力を得たことで得がたい執筆の支えとなっている。主人公は毎朝新聞政治部記者、弓成亮太。政治家・官僚に食い込む力は天下一品で、自他ともに認める特ダネ記者である。昭和46年春、大詰めを迎えた沖縄返還交渉の取材中、弓成はある密約が結ばれようとしていることに気づき、熾烈なスクープ合戦のなか、確証を求める弓成の前に、外務省高級官付き事務官の三木昭子が情報を流してくれる。三木昭子と弓成はそれ以前に男女の仲になっていた。取材源の秘匿か、スクープ記事か、強大な国家権力とジャーナリズムの全面戦争になる。弓成は逮捕され、ペンを折られ、心ないスキャンダル記事になっていく。そして検察・官僚との法廷戦があり、国家機密は誰のためのものか、今なお西山記者問題としてスキャンダルの的に扱われているが、沖縄返還時の密約については何ら問題視されるこ

とがない。日本は沖縄の米軍基地問題を今後どのように捉えていくのか、考えるきっかけになる小説である。

山崎豊子の小説は、取材を徹底的に行い、長い年月をかけて、取材・執筆しているが、あくまでフィクションであり、小説であることは間違いない。何が真実かは読者自身が判断しなければならないが、真実を探求するきっかけになることも事実である。

今、ウクライナでロシアによる戦争が連日報道され、戦争の悲惨さ、残忍さを目にしている。太平洋戦争でも、米軍は当初は軍事基地、航空機工場などの軍事施設が標的で、空爆していたが、次第にターゲットは一般市民になり、住宅地を焼き払い、その最初が「東京大空襲」で、一晩で 10 万人の命が奪われた。ウクライナの市街へのロシアの爆撃は 1945 年、昭和 20 年の東京、大阪、広島、長崎、沖縄ほか、日本全土で米軍による爆撃で、市街地が破壊されて 50 万人以上の命が奪われ、焼け野原になっていたことが、再現されているようにもみえる。今、憲法の改正、防衛費の増額等が検討されている。北朝鮮・中国・ロシアからの脅威を感じ、安易に防衛力を強化することを容認する雰囲気が出てきている。戦争につながることを安易に容認するようなことがないことを願っている。

歴史家の半藤一利氏も今年亡くなり、戦争を語り継ぐ世代が鬼籍に入ってしまうこともあり、残された者として、戦争を知らない者としても、戦争に対する悲惨さ、残忍さを再確認し、平和で戦争がない世界がいかに大切なことであるかを、私たちは次世代に伝えていくかが重要な役割であると思う。例えばウクライナ問題を他国のこととしてではなく、自国の、自分の問題として捉え、戦争のない、平和な時代を作る努力をし、それを次世代に伝えていく役割を果たしたいものである。その役割を果たすために、傘寿（80 歳）、米寿（88 歳）まで、もう少し長生きし、頑張ることを決意する次第である。